

## 嵐牛とその仲間たち (一)

―大井川原の相撲見物―

「嵐牛友の会」顧問

加藤 定彦

旧東海道の日坂―掛川を歩いた方は、旧道が国道の一号线と重なっている事任八幡宮の前を掛川方面へ暫く進むと陸橋があり、そのまま旧道を直進した右(北)側、屋敷の塀に幕末期の俳人伊藤嵐牛を紹介する案内板が立っているのを目にした記憶があるに違いない。

嵐牛は遠江国佐野郡汐井河原(現、掛川市八坂)の人で、寛政十年(一七九八)の生、明治九年(一八七六)五月二十八日の没(79)。俗名は伊藤清左衛門豊蔭、別号を柿園・白童子などという。三河国岡崎の卓池に俳諧を学び、国学・和歌を近隣伊達方だてがたの石川依平よりひら(一七九一―一八五九)に学んだ。農業と鍛冶を兼職、家督を譲ってからは俳諧に専心し、遠江国を中心に多くの門人を擁した。社中の発句集に『そのまゝ集』初編(安政四年・一八五七)と六編(明治四年・一八七二)があり、没後には門人らが『嵐牛発句集』(明治十三年)を出版している。

ご子孫の伊藤鋼一郎氏はここ十数年、嵐牛の遺著や遺

墨類を整理され、夫人の協力を得てインターネットのホームページでバーチャルミュージアム「嵐牛蔵美術館」を開設するなど、嵐牛の顕彰と襲蔵資料の活用に努められ、昨年の夏には俳文学会東京例会有志二十名余の訪問を受け、嵐牛の遺著や関係遺墨類を惜しみなく閲覧・鑑賞に供された。その後二ヶ月間、掛川市立大東図書館で市教育委員会ほかとの共催で特別展「ふるさとの俳人嵐牛とその仲間たち―芭蕉から十湖まで―」が催されたことも記憶に新しい。交通不便な会場にもかかわらず、地元市民だけでなく、遠来の専門家や俳句愛好家の方々も多数ご来場頂き、企画者の一人として感謝に堪えない。この場をお借りし心からお礼を申し上げます。

伊藤鋼一郎氏はさらに嵐牛の評伝書や遺稿集などの公刊を志しておられる。出版事情の厳しい昨今、出版の実現には原稿執筆だけでなく、頒布・普及面での広汎なサポートが欠かせない。よって、私どもはこの四月から「嵐牛・友の会」を立ち上げることとし、本誌紙面をお借りして嵐牛たちの作品がもつ魅力を伝え、俳句と郷土文化を愛する方々に入会と支援をお願いすることにした。

\*

特別展には嵐牛の遺した日記二冊、慶応三年と翌四年(明治元年)の二冊を出品した。解説にはすこぶる難澁

したが、慶応三年の日記では、門人たちの要請により、①二月四日と二十四日は島田、②三月九日と二十九日は森(森町)、③六月十三日と七月朔日は平宇(袋井市)・森・岡津(掛川市)、④七月十八日と八月八日は再び島田、⑤九月二十日と十月九日は横須賀(掛川市)、⑥十月十六日と十一月七日は平宇と六回出張、連句を指導している。

そのうち④の島田への出張は、二日前に迎えが来て、翌日に荷物を送り、十八日に出立、朝五ツ時に金谷横町の清四郎宅に寄り、大井川の川明きを待っていると同地の門人梅春・月塘が酒を持参。夕方、漸く川を渡って島田の雪香(秋野吉之丞)宅に到着。梅城らが早くから師の到着を待ちかねていた。同年の『俳諧とめ二』の筆録、

文月十八日初メ於有嘉園興行／両吟

角力取に近付出来て盆の月 習静

大事々々におろす初薯蕷

嵐牛

以下の歌仙によると、早速連句を巻き始めたらしい。

島田ではお盆休みということで大相撲を呼んだらしく、『金谷町史 資料編二 近世』六九二ページに、この年の文書として、「角力せわ人／町内中老」が「番生寺村／御衆中様」に宛てた八月廿二日付けの「六百拾壹文」受取証文「角力世話人金子請取寛」が収録されていて、近村で協力し合って相撲興行に当たったことが判明する。

帰庵しようとした八月五日、明け方からの降雨で大井川が川止めとなり、やむなく滞在、翌六日、ぜひ帰庵しようとして早起したがやはり川止めとなった。「夜に入り、関取小野川(関脇)、遊びに来。酒・小唄・三味線などよくせられて、更たけるまで遊びて帰らる。弟子などつれ来り、相伴人など多く、大ニにぎはへり」と番狂わせの展開となった。翌七日、快晴となったが、小野川に惚れ込んだのであろう、「さそはれて大ずまう見に行く。場処、大井川原にて、風ハあれど、石原ほめきつよし。七ツ(午後四時頃)前、打出し。帰路暑し」と相撲を見物、草臥れはてて早寝、翌八日、二句にして漸く帰庵した。

日記によると、島田では砂白・清節(桜島住)・松雨ら島田連中と風交、先の『俳諧とめ二』に両吟歌仙五巻、両吟半歌仙(十八句)二巻、三吟半歌仙一巻が筆録され、五巻は以下の嵐牛発句で始まっている。

打水や何処へも行かぬ風そよぐ

暇乞ひする人惜しむ夜寒かな

風ほそし礎きぬた聞く夜のひとへ藪

朝顔のとり付く庵の簾かな

先からは放さぬ友や秋のくれ

【会の連絡先】436-0004 掛川市八坂434-1(株) 工設計内  
携帯 090-1472-2972 Eメール takunise@titan.ocn.ne.jp



## 嵐牛とその仲間たち (三)

—— 永島拾山の遠州来遊 ——

慶応三年（一八六七）十一月十九日の日記に、「十湖、昼より帰る。ナゴヤ・京書状、見付宛白鱗舎拾山迄頼み遣はず」と登場する拾山も嵐牛と因みの深い友であった。

『蒲郡町誌』（昭和四年）などによると、拾山は上ノ郷向山（現、蒲郡市神ノ郷町）の旧家に生まれ、本名は永島重次郎。兄梶岡とともに岡崎の鶴田卓池に俳諧を学び、初め茶岡と号した。弘化三年（一八四六、二十九歳）、師卓池が亡くなると俳諧修行のため上京、花の本宗匠桜井梅室に入門し、その没後、嘉永三年（一八五〇）頃から諸国行脚に出、嘉永末頃には拾山と改号している。

安政三年（一八五六）、拾山は処女選集『ふくろさうぢ（袋掃除）』を出版、名古屋の梅裡がその序に拾山は古郷を出てから尾張に二年、京に三年ほど寓居したと述べており、不明な時期の足取りが判明する。本文中には

老るまで黄鳥人にしられけり 蓬宇

以下、嵐牛・拾山の三吟歌仙が収められ、同巻は嵐牛の嘉永七年（一八五四）『俳諧どめ』によると、同年夏、牛久保（豊川市）の伊東完伍宅で同門三人が俳席を囲んだときの作で、同じ『俳諧どめ』には他にも嵐牛・拾山同席

の二巻が書き留められ、二人に完伍・素行が加わった四吟四歌仙を収める『夏ごもり』（蓬宇跋）も同じ頃刊行されている。以後、二人は親密な風交を重ね、安政六年（一八五九）、拾山が京に白鱗舎と呼ぶ庵を結んだ際も、知らせを受けて嵐牛は、

江山（\*漂泊）の望み深かりし友拾山、

京師に住処もとむると聞て、

桃尻も居りし花の都かな（『嵐牛句集草稿初編』）の賀章を送り、記念の『明意集』に収められている。

拾山が慶応二年（一八六六、四十九歳）に二条斎敬公から花の本宗匠の免許を授かり、明治初年には文芸結社国風社の副社長となったことは、はやく『蒲郡町誌』の記すところである。嵐牛が没した八年後、明治十七年四月十一日、郷里の上ノ郷で亡くなった。享年六十七。

拾山の日記百二十冊余が遺っていることを知り、後裔永島家を訪問、同家と愛知県史編纂室のご厚意により現在調査・解説中だが、残念ながら日記は明治二年以降のもので、二人の交友の全貌を知ることが出来ない。しかし、明治三年の日記は、その行脚ルートと交流圏を教えしてくれる好資料なので、以下に粗々紹介してみたい。

卯月朔日、拾山は善光寺詣に京を発つ。街道沿いの俳家と風交、その謝義や配冊済みの『威徳集』（慶応四年）

とに言及、

中夏中の八日、見付の里なる五峰庵（杜水）を訪ふ。

聴雨来遊、同庵事、去る卯月中の九日、日も暮に至る頃、終には命終のよし申し来りければ、云々

と前書きして、

其もとも（\*あの世も）盛なるべし蓮の花

と追善句を手向け、また、亡妻の五七日供養を兼ね、下郷家の別時念仏に本家の隠居らとともに出席している。

七月二日の夕方やと帰庵、掃除や葬式・香料の礼などの後始末で一ヶ月ほどを過ごす。八月八日、大谷で釈尼晃雲の永代御読経を執行し、十四日、仏光寺柳馬場西へ入ル松の木裏へ転居、十七日には再び遠州へ向けて出立し、九月二十七日夕方、見付の杜水亭、鎌田屋に着く。

それからは杜水亭を拠点に、予め手紙で知らせて置いた気賀・笠井・友永などの嵐牛門人たちを歴訪する。十月七日、福田（磐田市）の大竹氏晴笠・春谷兄弟らと風交中、掛川から「嵐牛老人」が駆けつけ、風談の内に連泊、三日目の午後、連れ立って杜水亭に戻っている。

その間、日記には次のような句が書き留められ、年齢差（二十歳）を超えた交情が偲ばれる。

出合ひの約束遠し菊の花 嵐牛

紅葉見や連れに負れてわたる川

六十里便りもかなし青嵐 杜水

の悼句を贈られ、急いでトンボ返り、二十日、旧里に到着する。しかし、「兄貴はいまだ公用にて紀州行の留主」と聴かされ、また道を急ぎ、二十三日夕方、鳴海の秋湖宅に再び草鞋を脱ぐ。翌日の日記に、秋湖からこう（亡妻の名）の香料が到来した、と初めて妻が亡くなったこ

## 嵐牛とその仲間たち(四)

—— 塞馬と卓池門の継承 ——

三河国足助(豊田市)の同門先輩塞馬さいばについては、深津三郎氏の浩瀚な労作『板倉塞馬全集』(平成15)と『続板倉塞馬全集』(平成24)が備わっていて、選集はもちろん句稿・一枚摺・手紙から断片的な書留の類まで年次を追って網羅され、嵐牛研究にも欠かせない基本文献である。

とくに『続板倉塞馬全集』には、【4】の「2」「塞馬が交流した人達」の(6)に「掛川俳人・嵐牛との親交」の一節が設けられ、「塞馬は一生のあいだに、この鍛冶屋筆者注、嵐牛宅」の前を3回も通った。1回目は天保9年の松島紀行の途中で、ただ素通りしたに過ぎない。2回目は弘化4年の駿河紀行(卓池句碑募金のための旅)をした際で、この時は嵐牛宅に立寄り、訪問者寄書帳『錦木』へ俳句2句を記帳した」と述べ、写真図版とともに

### 旅中二句

北へゆく 鷹見おくりぬ 阿波々山  
はれぐと 明川越して 更衣 塞馬

を引用されている。「阿波々山」は嵐牛宅の北5キロほどにある粟ヶ岳(532トイ)で、頂上近くには磐座と阿波

の依平に礼を述べ、かつ風交する。九月十三日、依平にも暇を乞い、嵐牛に「影遠く見ゆる処まで」見送られて帰途に就き、途中、見付にも滞在し風交している。

この間の紀行(稿本)が『板倉塞馬全集』に収録される『櫃をさめ』で、塞馬が嵐牛宅から佐倉(御前崎市)の池宮神社に出掛けて見物した、櫃に詰めた赤飯を神社と池に沈め納めた法然上人に因む神事による命名である。

塞馬は、翌嘉永五年(一八五二)八月五日、岡崎燕ヶ岡で卓池句碑の除幕式を行い、翌六日に嵐牛を句碑に案内、十日に同地随念寺で七回忌の追善句会を催している。遺句集『青々処句集』は、塞馬が跋に卓池略伝を付し、前年十月付けとなっている。「七霜忌の位前に備えんとす」と述べているので、七回忌の正当命日に間に合わせた出版であろう。

深津氏は「掛川俳人・嵐牛との親交」のなかで、「続いて翌嘉永6年の4月、「塞馬(66才)は、完伍(58才)・嵐牛(57才)・蓬宇(45才)・笠露の4名を完伍宅(筆者注、豊川市牛久保住)へ呼び寄せ、15日間にわたり連句を巻きつづけ」け、造反の動きを見せている故水竹・三岳ら一派を牽制し、卓池門を塞馬から完伍、蓬宇へと継承させる意思を表明し、さらに遠州で宗匠活動を始めた嵐牛の参加を得ることで、その路線を公認されたもののよ

々神社があり、かつて無間の鐘で知られる観音寺(廃寺)があった。賀茂真淵が『岡部日記』(元文五年・一七四〇)に「雲高く立つ白雲のあはが岳あはと咎めて見ぬ人ぞなき」と詠んで以来、遠江国の歌枕とされ、地石川依平の詠んだ長歌・反歌は代表作の一つとなっている。

塞馬は、師の遺句集の編纂に携わり、成稿後、嵐牛の仲介で依平に校閲を仰ぎ、文法の間違いや仮名遣いなどを修正してもらった。その御札を兼ね、嘉永四年(一八五〇)秋、はるばる塩井川原に来遊、二週間ほど滞在し、嵐牛父子と

- ①雲ごとにころもとして月一夜 塞馬  
ひや／＼膳に上る船むし 嵐牛  
②はるか往て水影さしぬ暮の鳴 嵐牛  
月におくるゝ早稲の刈しほ 塞馬  
③たのまねば行灯もおかぬ夜寒哉 塞馬  
袂にひとつのこる初茸 洋々

の歌仙三卷(第三以下、引用省略)を両吟、隣村伊達方

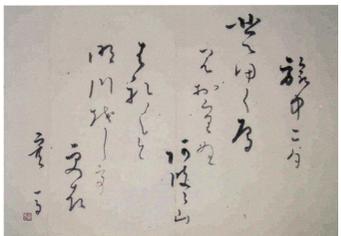
うに印象付けようとした、と分析されている。その折の四吟四歌仙の発句は、以下の四句である。

- ①にぎり江のすむ方出来し卯月哉 蓬宇  
②川岸へ出て夕空広き若葉哉 完伍  
③晴れくちの雨ふく窓や若楓 嵐牛  
④ひや／＼と芦間を出たり夏の月 塞馬

嵐牛の書留『俳諧どめ』を通覧すると、その後、涼石居(完伍宅)で催される「信友会」や前回に紹介した拾山らとの俳席などに嵐牛は屢々参加していて、それを漠然と同門の誼よしみからと誤認していたが、深津氏の分析通り、涼石居は塞馬晩年の計らいにより東三河卓池門の参集拠点とされ、嵐牛も積極的に呼応したのである。

文久元年(一八六一)、完伍宅に芭蕉堂が落成、五月二十一日から十日間、三河一円と西遠の卓池門人たちが参集し、記念の十歌仙が巻かれた。塞馬・嵐牛はもちろん、拾山も出席している(『此夕集 三十』)。しかし、岡崎や豊橋からの出席は蓬宇を除いてなく、塞馬の思惑と違って卓池門は一枚岩とはならなかったようである。

嵐牛の慶応三年(一八六七)日記には、極月三日の条に、「三州足助、池田や七右衛門殿文音。隠居塞馬老、八月より不快、霜月廿四日、遠行の由、訃音なり。八十六、七にもや成けん」と記すが、正しくは享年八十であった。



塞馬筆・旅中二句(『錦木』所収)

## 嵐牛とその仲間たち(五)

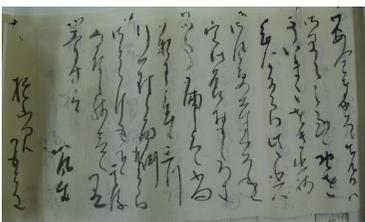
——永島拾山の東行——

前稿(三)で述べた拾山との交友の続稿である。

既述の通り、拾山は明治三年、二度にわたって遠州に  
来遊、そのうち十月七日から三日間、福田(磐田市)の大  
竹晴笠宅に滞在、駆けつけた嵐牛と風交し、十日、見付  
の杜水宅まで一緒に戻り、そこで別れた。

拾山は十一日、迎えに来た秋鹿古栗に伴われて友永(袋  
井市)の同人宅に五泊して両吟を満尾、十六日、古栗の案  
内で平宇(袋井市下山梨)の足立水音宅を訪ねて風交する。  
水音は嵐牛門の四天王に数えられる有力門人で、後号を  
湛水(たんすい)という。十八日は森(森町)の竹内試雪を訪ね、つ  
いで翌十九日は福川樂水宅に  
移って両・三吟、二十三日は  
鎌田(磐田市)の石井野風、  
二十五日は中泉(同上)の旭  
齋と嵐牛門を歴訪、連句指導  
をつづける。

その間に地元連中から寄せ  
られた句稿群が拾山資料中に  
含まれ、嵐牛の手紙も一通混



拾山宛嵐牛書簡—永島勉氏蔵—

寺にそれを移し、地方には中・小教院を設け、神官・僧  
侶以外からも広く人材を求めたこととした。翌三月末、  
永平寺貫首、大教正の細谷環溪が俳諧師からも教導職に  
任命すべきで、府下にも両三名の適任者がいると建白し  
た。そこで四月、大教院において俳諧師の考査試験が実  
施され、五月に三森幹雄と鈴木月彦が合格、六月には関  
為山、橋田春湖、鳥越等裁の三老が推薦された。

為山から手紙で連絡を受けた拾山(56)は、古老八木  
芹舎(79)にかわって京俳壇の代表として、東行するこ  
とになった。途中、遠州連中を再訪しながらその年五月  
十四日、汐井川原の嵐牛を訪ねて一泊する。翌十五日、  
歌枕小夜の中山を越え、

撫でてゆく山の姿や青嵐(\*前書省略)

の自作と、

さくら見しこゝろ静まる牡丹かな

以下三句の嵐牛吟を書き留めている。その日、大井川を  
渡って島田の秋野雪香、ついで山本習静を訪ね、一泊し  
ている。日記に「おとゝし(\*明治四年)も此の山本氏  
にとどめられ侍りしなり」と記しているの、旭齋のい  
う拾山の嵐牛宅訪問はその折のことかもしれない——雪  
香・習静については、本稿(二)参照——。

また、同日の記事は流翠(瀬戸、青島屋)、雨石(静岡

入している。十一月廿三日付、拾山宛で、——先日の風  
交はあつという間でした。折角のお誘いながら咳が出て  
止まらず、今回は遠慮します——という断りの手紙で、「句  
なし」と謙遜しつつ、

両の肘掛くれば眠き火鉢かな

伐つた松惜しみに出たり冬ごもり

冬枯や夜市をのぞく狐もどり

はき替たわらちのちさき寒さかな

など、句稿二枚を同封している。卑近な素材・対象なが  
ら、表現・俳意のいずれも確かで、詩魂に緩みはない。

同じ資料群に含まれる旭齋の手紙は、近詠三句を拾山  
に送って批評を仰いだものだが、そのはじめに、「先般は  
汐井川原まで御越被遊候由、向寒の節、先々御路中、  
無御障、大慶仕候」と述べ、日付を欠いているけ  
れども、同じ頃であろう。日記には中善地(浜松市東区  
豊町)の十湖などと風交後、閏十月二十七日、旧里に寄  
つて、十一月二十一日、京に帰庵しており、記事も見当  
たらないので、訪問が実現したかどうか不明だが、嵐牛  
を思慕する念が強かったことだけは確かであろう。

明治五年三月、政府は神祇省を廃して教部省を設け、  
教導職十四階級を定め、神官・僧侶から任命した。同年  
九月、大教院を紀州邸に設置、翌六年二月には芝の増上

上穀町、三河屋龍次)のメモで終っているの、習静か  
ら同門の二人を紹介されたのであろう、翌十六日には瀬  
戸の流翠を訪ねた後、宇都ノ谷峠、鳶の細道を二十年ぶ  
りに通って雨石宅に一泊、風談に短夜を過ぎし、

細道をゆかずともこの鳶わかば  
といった自作や、

短夜や釣瓶の水のもるゝ音

時鳥啼くや家船の朝けむり

などの句を書き留めている。

しかし、それ以降は卓池門と縁の薄い土地ばかりで、  
文音で旧知の俳士、たとえば静岡元鷹匠町の小川尋香や  
大磯鳴立庵の大沢寿道を訪ねるぐらいで、五月廿一日、  
金川(神奈川)から新橋まで前年開通したばかりの「蒸  
汽車」に乗り、東京中橋桶町の為山宅にたどり着く。

東京で諸名家と交流を重ねるなか、六月十七日、祭礼  
と開講式で前代未聞の賑わいを見せる大教院に参拝、さ  
らに同月末、大教院の大祓に出席し、神殿に、

社頭祝

すむ空のことに涼しき祭かな

の句を奉納、それが記念選集『真名井』(官許教林盟社、  
翌七年刊)の巻頭芹舎の次に入集する荣誉に浴した。尊

王家で信仰の篤い拾山には忘れがたい東行であった。